

「融合寺院」の概要と成立背景

ヴァーラーナシー旧市街(インド)における既存ヒンドゥー寺院を核とした増築現象に関する研究

OUTLINE AND BACKGROUND OF "MERGED TEMPLE"

Study on extension and construction surrounding existing Hindu temples in Varanasi Old City, India

柳 沢 究^{*1}, 小原亮介^{*2}, 山本将太^{*3}

Kiwamu YANAGISAWA, Ryosuke OHARA and Shota YAMAMOTO

This paper discusses the outline and the background of the phenomenon named "merged temple", a composite building occurred by extension covering or wrapping an existing Hindu temple, frequently observed in the Old City of Varanasi (Uttar Pradesh, India), revealing their number and distribution, morphological variations, forming process and condition, and so on, through field survey and interviews with residents. Merged temples of various shape and degree are generated as a result of interacting of extrinsic development pressure and intrinsic characteristics of Hindu temple in the urban space historically amassing numerous temples.

Keywords : Banaras, Religious Architecture, Urban Space Updating, Hinduism, Extension

バナールス, 宗教建築, 都市空間更新, ヒンドゥー教, 増築

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

本稿は、インドにあるヒンドゥー教の聖地ヴァーラーナシーで観察される、既存のヒンドゥー寺院を核とする増築現象「融合寺院」を対象に、その実態と成立背景の概要を把握することを目的とする^{注1)}。

「融合寺院」とは、元々は独立して建つヒンドゥー寺院が隣接建物の建設行為により囲い込まれることで生じる複合的建築物 (Photo 1, Fig.1) を指す、筆者らによる呼称である^{注2)}。ヴァーラーナシーには数多くのヒンドゥー寺院があり、その少なくない部分が融合寺院であることが確認されているが^{注3)}、現地では一部の敬虔なヒンドゥー教徒は眉をひそめるものの、ほぼ等閑視されている。しかしながら注目すべきは、既存の寺院建築をそのまま残しその上に新たな建設を重ねるという、融合寺院の特異な建設プロセスである。結果として生じる聖俗の混淆した建築・空間は、インドの都市・建築における聖性の概念とその運用の理解に繋がる、きわめて興味深いサンプルである^{注3)}。また融合寺院に見られる新旧の建設行為の重層は、ケヴィン・リンチが論じた、時間的痕跡の都市空間における表現手法の好例と見なしうる^{注4)}。その発現の背景や諸条件、周辺への影響等を明らかにすることは、当該都市やインドにとどまらない、時間的層性を備えた都市空間の形成に資する重要な知見になると考える。以上の視点から本稿では、臨地調査と居住者インタビューに基づき、これまでほとんど明らかになっていない融合寺院について、その数や形態の類型・形成にいたる経緯等を、具体的に明らかにしていきたい。

1.2 調査対象地区と調査の概要

調査対象地区は、都市の最重要寺院であるヴィシュワナートVishvanath寺院を中心とする、旧市街の中でも特に数多く寺院が立地する一帯である^{注5)}。活発な都市活動の営まれる商住混在地区で、狭隘な街路の両側に建物が隙間無く建ち並ぶ、人口密度4~5万人/km²というきわめて高密度な市街地である。1951年の都市部人口は約36万人、現在ではその3倍の約120万人に達する。人口増は主に市街域の拡張によるが、旧市街の高密度化もこの間継続的に進行している^{注6)}。

本稿は3次にわたる臨地調査をもとにする^{注7)}。対象地区内の全街路を歩き、目視とヒアリングにより寺院の所在を確認、各寺院の立地・建築形式・内外観等の記録とともに、融合寺院であるか否かの判別を行った。特徴的な事例については居住者へのインタビューを実施し、また同意が得られた場合は内部空間の実測を行った。



Photo1 Merged Temples (type-II & III)

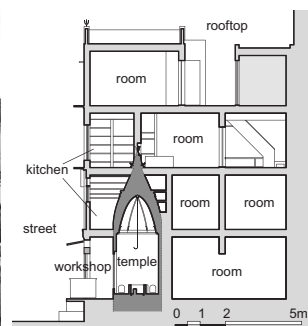


Fig.1 Cross Section of a Merged Temple (type-IV)

*1 京都大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

*2 住友林業(株) 修士(工学)

*3 山本建築設計 修士(工学)

Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr.Eng.

Sumitomo Forestry Co., Ltd., M.Eng.

Yamamoto Architecture Design Office, M.Eng.

2. 既往の研究

2.1 ヒンドゥーの大伝統に即した寺院と大衆的寺院

ヒンドゥー寺院建築研究の主流をなすのは、ヒンドゥー教の文化的背景に即して寺院の象徴的意味や様式・造形の発達史を論じるものである^{10,11)}。サンスクリット文献や実測と照合しつつ、時代・地方毎に寺院の構成原理や宇宙論的構造、設計手法や寸法体系などを、具体的・実証的に論じる多くの研究が重ねられており¹²⁻¹⁵⁾、ヒンドゥー教の伝統に沿った寺院建築の特質の理解の前提となる。これらの研究の対象が基本的に史的価値の高い一部の寺院に限られる一方で、インド諸都市には、本稿で扱う寺院がそうであるように、都市生活に密接したより小規模で大衆的なヒンドゥー寺院が遍在しており、近年これら大衆的寺院への関心が高まりつつある。中でも注目されるのは、都市の空地に発生する小祠が拡張を重ねながら発達する過程を論じるBharneら¹⁶⁾である。関根¹⁷⁾は文化人類学的視点から類似の現象に注目し、その権力への抵抗装置としての機能を指摘する。都市部の大衆的寺院を対象に、ヒンドゥー教や寺院に内在する論理だけでなく、現代の社会や都市生活との動的相互関係の中で寺院の存在を評価しようとする視点は、本稿と共通するものである。ただし、これらの論考が基本的に寺院単体に注目するのに対し、隣接する建物との複合現象に焦点化するの、本稿が独自に提示する視点である。

ヴァーラーナシーを対象とした諸文献においても、融合寺院に触れるものはほとんど無い。当地の寺院の建築的特性を包括的かつ詳細に論じる文献^{18,19)}でも、融合寺院は看過されている。寺院の運営実態を論じるVidyarthi²⁰⁾は、わずかに融合寺院と思われる事例に言及するが、寺院の不法占拠あるいは世俗的転用という限定的理解に留まっている。柳沢⁵⁾は、一定数の巡礼対象寺院が融合寺院であることを初めて具体的に指摘しており、本研究の端緒となるものである。

2.2 寺院建築の扱いに関する規範

ヒンドゥー教における寺院の扱いに関する規範は、融合寺院という現象の生起に深く関連すると考えられる。サンスクリット文献群における記述の検討は筆者の手に余るが、管見の限り、寺院の設計・

建設にまつわる膨大な規定を記す『マーナサーラ』にも、一旦建設された寺院の扱いに関する記述は見られない。種々の行動規範を示す『マヌ法典』は、神殿（寺院）と神像の破壊の罪をごく簡単に挙げるのみである^{注8)}。

とはいえ、寺院の破却が許されないことは自明と考えてよいだろう。寺院の占拠や世俗の用途への転用は、教義の上でも社会的にもタブーとされる^{注9)}。融合寺院に関連して重要なのは、寺院の聖性は場所と不可分に結びついており、寺院は移動できないという原則である。おのずから神が現れる場所もあるが、そうでない場合は幾重もの儀式を経て土地が浄化される。いずれにしても聖性は特定の土地と結びついており、それを基盤に神の宿る場所としての寺院が成立するからである^{注10)}。いわばヒンドゥー寺院は、破壊も転用もされず寺院で在り続けるという継続性と、固有の場所と結びついた不動性ともいべき性質を帯びていることになる。したがって一度誕生した寺院は、(現実には種々の例外もありうるが)少なくとも理論上は、同じ場所に寺院として存在し続けることになる^{注11)}。

寺院の存続が理論上安定している一方で、その物的構成としての寺院建築は、寺院の役割の変化に応じ、しばしば増築・拡張されるといふ柔軟な可塑性を帯びている。南インドに見られる巨大な寺院複合は、増築と寺域の拡張を重ねながら形成されたと考えられており^{注12)}、Bharneらが論じる祠の成長は、そのような寺院拡張の最初期段階を示している^{注13)}。増築部は基本的に増大する寺院機能の一部を担うが、南インドの寺院複合では劇場や集会所等、Bharneの報告する事例では祠の維持管理を行う非聖職者の居住スペース等、しばしば副次的・世俗的な用途を含むものであることは注目すべき点である。

3. ヴァーラーナシーのヒンドゥー寺院

3.1 寺院の概要(数・分布・設立・所有・運営)

本稿では、その構造や規模によらず、ヒンドゥー教の諸神(具体的には神像やリング等の神体)を祀る施設をヒンドゥー寺院とする^{注14)}。今回の調査では、融合寺院となっているものも含め、532の寺院を確

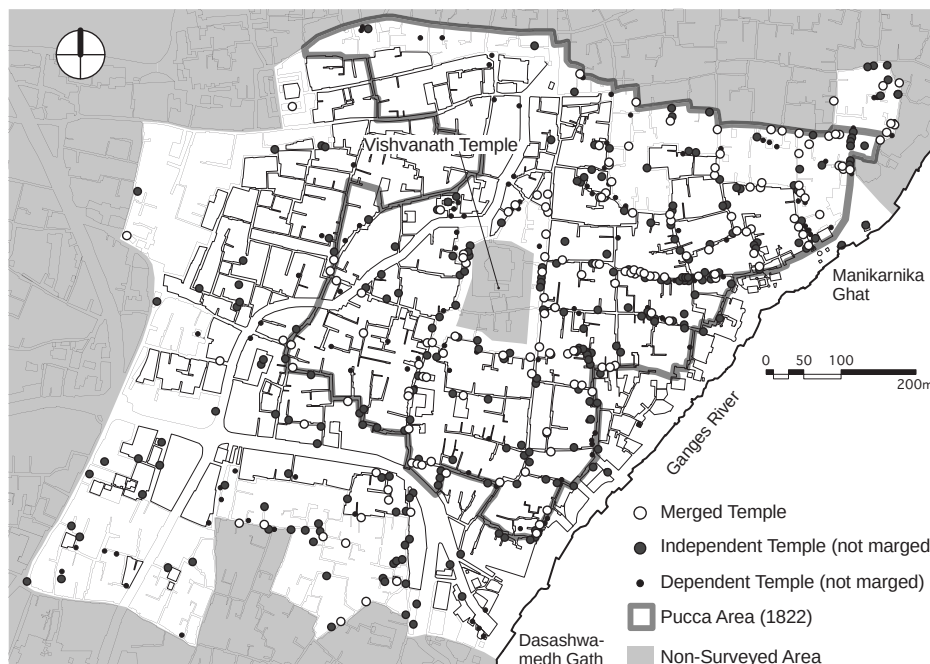


Fig.2 Distribution of Temples in Center of Varanasi Old City

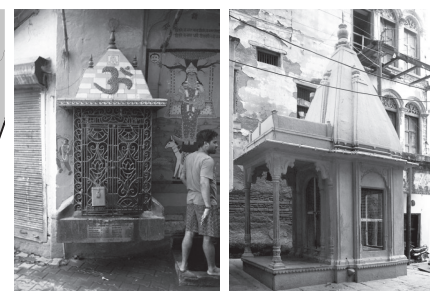


Photo2 Example of Dependent Temple

Photo3 Typical Independent Temple

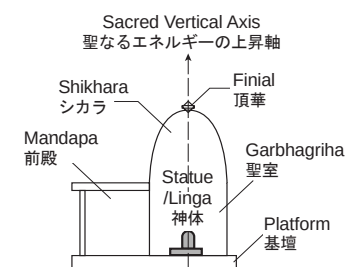


Fig.3 Basic Constitution of Independent Temple in Varanasi

認した^{注15)}(Fig.2)。ヴァーラーナシーはシヴァの都とされ、祭神はシヴァ神が大多数である。調査地区の面積(約57.9万㎡)を単純に寺院数(532)で除すれば、1寺院あたりの面積は1,088㎡(33m四方)となる。非常に高密度な分布といえる。

寺院は聖地としての長い歴史の中で時々設立されてきたものであり^{注16)}、個々の寺院の設立や建設の経緯は必ずしも明らかではない。巡礼地として古文献に記された数百年の歴史を誇る寺院も多いが、都市部に現在ある寺院建築は、すべてイスラームによる支配を脱した18世紀以降のヒンドゥー復興期の建設と考えられている^{注17)}。寺院の建立は大きな功德とされるため、成功した事業家等による寺院の寄進は今日でも行われている。空地に自然発生した小祠が徐々に寺院へと成長する事例は、当地でもしばしば観察される。いずれにしても、聖地としての歴史を通じて寺院の建設が集積し、市街地にこれだけ多くの寺院が高密度に立地することは、融合寺院の発生する背景としてまず確認すべき事実である。

所有や運営については不明な点が多いが、Vidyarhtiによれば、教団や公共的組織により運営される寺院は稀で、ほとんどの寺院は個人や少人数のグループにより所有され、所有権は不動産と同様に売買されうる。運営は僧侶でもある所有者自身が行うケースが多く、非聖職者の所有者が僧侶を雇う場合や、近隣住民が運営に参画する場合もあるという。また、定期的に管理を行う僧侶のいない放棄された寺院が3割以上あることも指摘されている^{注18)}。

3.2 独立した固有の建築物をもつ寺院の基本的構成

建築的側面に注目すると、ヴァーラーナシーの寺院はまず、寺院固有の独立した建築物をもつ寺院(独立寺院)と、寺院固有の建築物をもたない寺院(非独立寺院)とに大別できる。非独立寺院は、主用途が寺院ではない建物の一室や外壁のニッチに神体を祀るもの等である(Photo 2)。独立寺院の規模は、高さ1mの小祠から十数mの大寺院まで幅があるが、概ね高さ数m程度のものが多い(Photo 3)。基本的な構成は、規模や祭神の種別に関わらず次のようである(Fig.3)。

地面から数十cm高い基壇上に、ポーチ状の前殿(マンダパ)を備えた聖室(ガルバグリハ)が載る。聖室内には神体が据えられる。前殿は壁で囲われる場合や省略される場合もある。素材は石またはレンガ造で、プラスターや塗料が塗られることが多い。聖室の上には多くの場合、塔状の屋根シカラが載る。「シカラ」はサンスクリット語で「頂」を意味し、その形状が表象するように寺院は聖なる山と同一視される。神体の置かれる聖室中心部とシカラの頂部とを結ぶ垂直軸は、寺院の有する聖なるエネルギーの上昇運動を象徴し、寺院を宇宙の構造と接続する宇宙軸でもある。それゆえシカラ、特にその頂部にある頂華は、きわめて象徴性の高い部位とされる^{注19)}。寺院建築は神の宿る容器であり、また礼拝の空間を提供するとともに、寺院建築そのものも一定の聖性を帯びた存在と見なされる。

4. 融合寺院の分布とその形態的類型

4.1 融合寺院の定義と判定要件

本研究では「融合寺院」を次のように定義づける：寺院固有の独立した建築物をもつヒンドゥー寺院(主寺院)に対して、その建築を覆うように隣接する建物(副建物)が増築または新築された結果生じた、内部空間をもつ恒久的な複合的建築物(Fig.4)。

上記の定義は、融合寺院の主寺院となるのは独立寺院のみである

ことを意味する^{注20)}。また、寺院周囲を塀が囲むだけで屋根が無い事例や、寺院外壁への小屋掛け等の仮設的な事例は除外される。

調査にあたっては、以下の4要件全てを満たす事例を融合寺院と判じた^{注21)}。①主寺院と副建物が空間または外観において壁厚以上に重なり合う。②仮に副建物を除いても主寺院が独立した寺院建築として成立する。③仮に主寺院を除くと副建物が構造的・空間的・形態的に不完全となる。④副建物が恒久的な内部空間を有する。

4.2 融合寺院の数と分布

調査地区内で確認されたヒンドゥー寺院532のうち、融合寺院は154であった。独立寺院は248、非独立寺院が130である(Fig.2, Table1)。定義に従い、融合寺院の主寺院がかつて独立寺院であったと考えれば、独立寺院から融合寺院へと変化した割合は、[融合寺院数/(独立寺院数+融合寺院数)](以下、変化率)の値で概括される。調査地区全体での変化率は38%であり、独立寺院の約4割が融合寺院へと変化したと考えることができる。当地において、融合寺院が実にありふれた存在であることがわかる。

融合寺院の分布を見ると、西部に少なくヴィシュワナート寺院以東に高密度に分布する。ヒンドゥー教徒とムスリムの住み分けを反映しており、寺院全体の分布傾向と概ね一致すると見てよい^{注22)}。より局地的な傾向を把握するために、市街化時期が古いパッカ領域^{注23)}内外での比較を行った(Table1)。結果、パッカ領域内43%・領域外26%と、領域内外の変化率にやや差が見られた。市街化時期の古いエリアでは相対的に市街の高密度化が進んでいるため、土地に余裕の少ないことが融合寺院の発生に影響していることを示唆する。

4.3 融合形態の4類型

融合寺院における主寺院と副建物の融合の程度と様態を検討するため、まず、平面的な重なり(部分/全体)と頂華の状態(開放/被覆)という、明快に判別可能な2つの指標を用いて、I～IVの4類型を得た。頂華の被覆に注目するのは、前述のように頂華がヒンドゥー寺院の象徴性を担う重要な要素であり、寺院の聖性や象徴性への対応態度として有意な相違と見なしうるためである。各類型はさらに、重なり具合いと頂華と副建物の関係から8種に細分類できる(Fig.5, 6)。

I型【平面部分/頂華開放】：全事例の半数近くを占める。頂華を含む主寺院の元々の外観が大部分表出されており、副建物との一体化の度合いは小さい。清掃の痕跡や供物が観察され、活発に使われていると判断される寺院の多くは、このタイプに含まれる。大半は

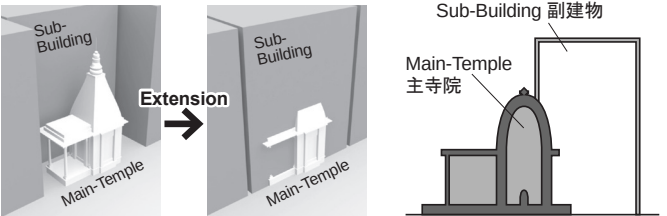


Fig.4 Conceptual Image of Merged Temple

Table1 Number of Temple

	Survey Area	Inside Pucca	Outside Pucca
Merged Temple [a]	154 (29%)	126	28
Independent Temple [b]	248 (47%)	168	80
Dependent Temple [c]	130 (24%)		
total [a+b+c]	532 (100%)	294	108
Change Ratio [a/(a+b)]	38%	43%	26%

副建物が聖室に多少重なるⅡ₂型であり、他には前殿部にのみ増築されたⅠ₁型、副建物上層部が聖室上に張り出しているものの頂華には接触していないⅠ₃型が見られる。

Ⅱ型 [平面部分／頂華被覆]：主寺院の外観の大部分を現しながらも張り出した副建物上層部が頂華近傍のみを覆うⅡ₁型と、主寺院の外壁一面のみをかりうじて露出する他は全て覆われたⅡ₂型という、重なり程度がやや異なる2種がある。

Ⅲ型 [平面全体／頂華開放]：平面的には主寺院全体が副建物に包含されるが、断面的には頂華を含むシカラの一部が副建物の屋上に

現されたものである。その中でもⅢ₂型は、シカラの周囲を頂華を越える高さの副建物で囲われながらも頂華は上方に向かって開放された事例である^{注24)}。

Ⅳ型 [平面全体／頂華被覆]：シカラを含む主寺院全体が、平面的にも断面的にも副建物に完全に包含されているものである。全類型中融合の度合いが最も重い。寺院の存在は、特に配慮して開口部が設けられた場合を除き、外部からはほとんど認知しえない。副建物の床面積増大の意図が強く働いたケースと考えられる。

半数近くは融合の度合いが軽い(Ⅰ型)。一方で、寺院平面を丸ごと包み込む重度の融合は4割弱を占め(Ⅲ・Ⅳ型)^{注25)}、3割の事例では頂華が覆われてもいる(Ⅱ・Ⅳ型)。全体としては、融合度合いの軽いⅠ型と比較的重いⅡ～Ⅳ型とが、ほぼ半々の割合で混在している。Ⅰ₃型とⅢ₂型からは、床面積を大きく増す増築がなされつつも、明らかに頂華の被覆を避ける意図が看取される。多数あるⅢ₁型とあわせて、頂華の被覆を避ける傾向の存在は明確である。またⅠ₃型とⅡ₁型は、いずれも上層階の面積を大きく増しながら、下層部では寺院の外観を明らかに意図的に大きく表出している。Ⅱ₁型において頂華近傍のみが被覆されているのは、張り出した上層部を主寺院の躯体により支持するという構造上の解決が、頂華の開放に優先した結果と考えられる。Ⅱ₂型やⅣ型の内部では、寺院躯体が上階を支える状況はしばしば観察される(Fig.1)。

主寺院と副建物の平面的な重なり、すなわち副建物が主寺院を覆う度合いの大きさは、副建物による容積増の要求の強さを端的に示すものだろう。増えた容積は新たな居室や店舗として利用される。一方でその実現にあたっては、同時に既存の主寺院に対する各種の配慮がなされていることがわかる。頂華の被覆の有無は、寺院の象徴性に対する配慮を反映したものであり、寺院外観の意図的な表出もまた、寺院の存在を尊重する態度の一つと解釈できる。そのように考えると、個々の融合寺院の場合には、主寺院の存在を尊重する指向と、副建物の増大により得られる実利への指向という、ベクトルの異なる2つの力が働いており、上記の形態的バリエーションはそのバランスの中で生じていると理解することができる。また、各類型の事例数に極端な偏りがないことは、全体としては2つの力がほぼ拮抗していることを示すものと考えられる。

4.4 建築形式の影響

調査で確認された寺院の建築形式は、各要素の有無や数から5種に分類することができる(Table2)。聖室と前殿を備えた〈基本型〉とその省略版の〈無前殿型〉が、全体の8割を占める。これらの建築形式の違いが融合寺院の発生に与える影響を検討するため、建築形式別に融合寺院への変化率を比較した。全体での変化率38%に対し、〈基本型〉は48%とやや高く、〈無前殿型〉はほぼ同率、〈無シカラ型〉は6%と顕著に低い。〈無シカラ型〉の大半はRC造陸屋根の寺院であり、いずれも比較的近年建設されたと思われるため、寺院建築の築年数が融合寺院となる条件に影響している可能性がある。複数のシカラや聖室からなる〈複シカラ型〉〈複聖室型〉はやや低い値を示す。これらの特殊な形式の寺院には、精緻な意匠を施された由緒のある、つまり比較的重要性の高い寺院が多い。事例数が少ないため注意があるが、このことが融合寺院への変化を抑制している可能性が伺われる。なお、建築形式と上述の融合形態の類型との関連について、同様に検討したが、特筆すべき関係は見られなかった。

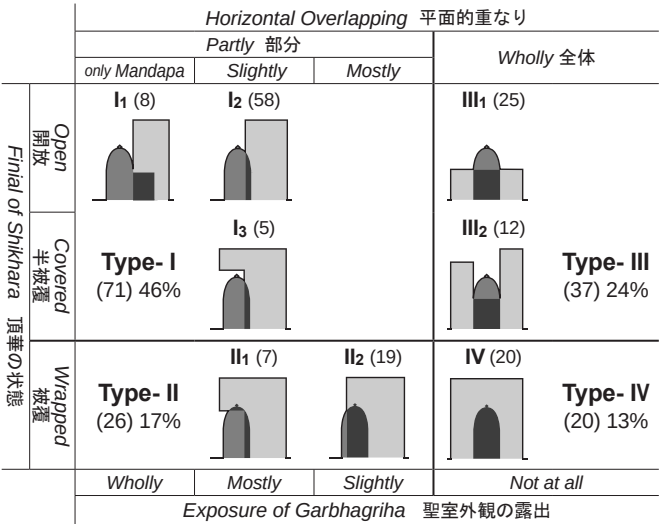


Fig.5 Typology of Merged Temple (n=154)

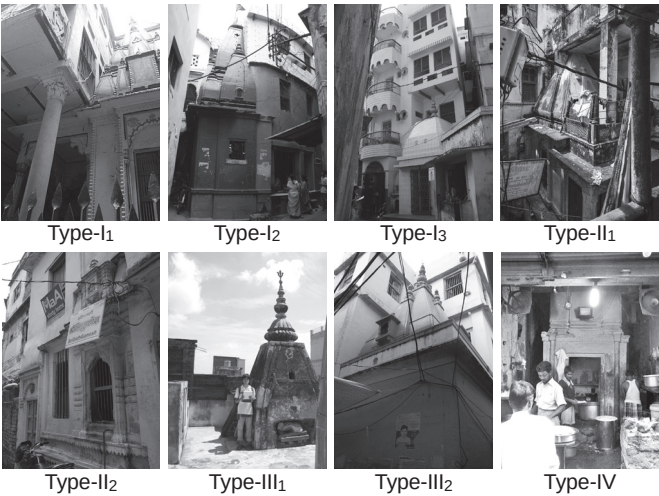


Fig.6 Appearance of Merged Temple

Table 2 Temple Form and Change Ratio							
Temple Form							
	Basic 基本型	Mandapa-Less 無前殿型	Shikhara-Less 無シカラ型	Multi-Shikhara 複シカラ型	Multi-Complex 複聖室型	others	
Merged Temple	154	62	74	2	2	6	8
Independent Temple	248	66	112	29	7	17	17
sum	402	128	186	31	9	23	25
Change Ratio	38%	48%	40%	6%	22%	26%	32%

5. 居住者から見た融合寺院

融合寺院の形成にいたる背景と主寺院に対する意識を探るために、Fig.5, 6に示す各類型の細分類をカバーするよう特徴的な事例を選出し、計23件について、当該の居住者に対する通訳者を介したインタビューを実施した。質問項目と回答要旨の一部をTable3に示し、以下にインタビューを通して得られた知見を項目毎にまとめる。

なお、元からある主寺院が後に副建物に覆われたという、融合寺院の定義に関わる建設時期の前後関係は、インタビューとそれに伴う内部状況の目視から、いずれの事例においても確認された。調査で用いた融合寺院の判定要件には、一定の妥当性があるといえる。

5.1 居住者（インタビュー）について

居住者構成：#17を除けば、単一核家族または拡大家族が基本であり、主に2～5階建の建物に、間借りの貸借人も含め、数人から20人程度が居住する。いずれも旧市街の標準的な住居である。

所有関係：全ての事例において、主寺院と副建物は一体的に所有されている。#15, 17を除く21件で所有者＝居住者（の家族）であり、いずれも個人所有である。その中には、高名な巡礼地である寺院や、数百年前には王族が所有していたと伝えられる寺院も含まれる。

職業・カースト：居住者の職業は多様であり、一定の傾向はない。居住者のカーストを確認できた19件のうち、本来寺院を司るべきとされるバラモン・カーストに属するのは10件である。融合寺院は、必ずしもバラモンによって所有／居住されていない。ジャイナ教徒が所有者（居住者）である事例も確認された（#11）。

5.2 副建物について

用途：ほとんどの事例において、副建物の主たる用途は住居である。店舗や事務所用の室を含むものも多い。少ない例として#1, 10, 17では、それぞれ寺院・ゲストハウス・寮が主用途となっている。

居住年数：いつから当地に一族が住んでいるかを尋ねると、半数以上は「曾祖父の代から」「100年以上前」といった、とにかく昔から住んでいるという曖昧な回答であるが、9件では比較的近年の具体的な年代が挙げられた。いずれも寺院付きの土地・建物を購入し移住したものであり、寺院を含む土地や建物の売買が今も一般的であること、また居住者の入れ替わりが少なくないことがわかる。

5.3 主寺院について

用途：ほぼ全ての事例において主寺院は、融合寺院となった後も寺院機能を維持している^{注26)}。すなわち神体を有し日常的に祭祀が営まれ、程度の差はあるが、清掃等の維持管理がなされている。

建設年代：主寺院の建設年代は、2件を除き（#11,15）、居住者も把握していない。年代推定には別途詳細な検討が必要となるが、寺院の意匠や様式からは、ヴァーラーナシーの寺院の多くがそうであるように、いずれも18世紀から20世紀初頭にかけてのヒンドゥー復興期に建設されたものと考えられる。

祭祀と管理：居住者が非バラモンの場合も含む大半の20件において、主寺院の日常的な礼拝儀式（プージャ）や維持管理は、所有者（の家族）や下宿人など居住者自身により行われている。カーストに関わらず居住者が祭祀を行う点は、一般的なヒンドゥー教徒の家にある家庭内祭壇と同様の扱いである。所有者がジャイナ教徒（#11）、主寺院が店舗として使用される（#6,8）といった事情がある場合、近隣住民や店舗の貸借人が祭祀や管理を行い、所有者（居住者）が寺院運営に関わらないケースも確認された。なお、寺院内部の店舗としての

使用は、望ましくないものと考えられている。

開放性：上述のように主寺院は私的に所有・管理され、かつ主寺院の正面入口は、融合類型Ⅰ型の一部を除き、副建物内のプライベートな領域に囲い込まれている。それにもかかわらず、家族しか参拝できない1件（#22）を除き、他はすべて非居住者（近隣住民や巡礼者等）の主寺院への参拝を認めている。主寺院へのアクセスが基本的に開かれており^{注27)}、前殿や聖室内での参拝が可能な事例が10件（表中：○）、他12件は積極的には開いていないものの、希望者は副建物内に立ち入り同様に参拝できる（△）。実際に巡礼者や近隣の人々が大勢参拝に来る寺院も少なくない。また4件の事例では、正面入口とは別に街路に開いた格子付開口部が聖室に設けられており、街路から礼拝ができるよう配慮されている（※）。寺院へのアクセスは、街に対してオープンであるよう意識的に維持されているといつてよい。

5.4 融合寺院となった経緯

年代：主寺院を覆う副建物の建設行為が行われた時期について、13件において具体的な年代が得られた。インタビューやその父・祖父等が当事者として関わっている。その年代は、古くは百年以上前から、主には20世紀後半から近年までにわたり、その間、融合寺院が継続的に生起していることがわかる。また、年代不詳の他の事例^{注28)}についても、副建物の意匠や構造から判断すると、少なくとも主寺院に接する部分については、植民地時代に遡るとは考えにくく、ほとんどが20世紀後半以降の建設と推測される。

融合寺院に至る経緯：寺院付きの土地・建物を購入した際に、すでに融合寺院となっていたケースは3件（#8,13,23）である。#11は建替えを契機とする。経緯不詳もあるが、その他の多くはインタビューの一族の当地での居住の中で、ある時期に増築された結果である。家族が増えた、あるいは部屋を増やす必要があった等、生活を通じたごく一般的な面積増を基本的な動機とする。寺院の占有や囲い込みは、増築の目的としては一切語られない。また、インタビューおよび建物の状況からは、数多くの事例において、融合寺院となった以前（#2,4,5,7,9,20）および以後（#3,12,14,15,16,18,19,20）にも副建物の増築があったことが確認された。つまり、増築は床面積拡大の要求に応じ断続的に行われており、融合寺院はそのような一連の増築行為の中で副次的に形成されたと考えられる。

寺院の除却や移転：「寺院の除却や移転という選択肢がありえるか」という問いには、ほぼ全ての事例において「決してない」との回答である。あわせて「家の中の寺院は心の平穏をもたらす有難い存在」という意見が添えられることが多い。少なくとも融合寺院の居住者にあつては、寺院の除却・移転を禁ずる規範は強く意識されており、かつ積極的に寺院を受容する姿勢が見られる。唯一、所有者がジャイナ教徒である#11は、建替え時に寺院の除却を検討したが、ヒンドゥー教徒の近隣住民からの反対意見が強く断念したという。また、寺院付き土地を購入した事例では、前所有者が寺院を残す人への売却を希望していたという話が複数語られており、所有者の意向で寺院が除却される可能性もあることがわかる。とはいえ寺院の存立が、#11の例が示すように、必ずしも所有者の一存では決しえない一定の公共性を帯びた課題と見なされていることは特筆すべき点である。

寺院建築の扱い：主寺院の建築躯体は基本的にそのまま維持される^{注29)}。特に聖室については、仕上げの美装は積極的に行われるが、シカラを含む躯体の改変は慎重に避けられている。寺院建築の

Table 3 Abstract of Interview for Residents of Merged Temples

#	Ownership *1	Resident (Interviewee)		Sub-Building	Main-Temple	Circumstances of Merging							Type
		Age	Occupation	Usage	Period *2	Management *3	Access *4	Period *5	Outline of Merging Process	Caution for Dealing Temple Building			
		Relation w/ owner	Brahmin / non-Brahmin										
1	P	40 himself	astrologer B	temple, residence	3 gener.	residents	○※	-	Buildings have been this form since early stage. The third floor of sub-building was expanded afterward. Main-temple and sub-building are "not overlapping, only being in contact".	<u>Not constructing building over temple.</u>	I ₂		
2	P	42 himself	sari seller non-B	residence	cir. 1950-	residents (lodgers)	△	-	Main-temple was probably built by Maharaja of somewhere. His grandfather bought this land with the temple circa 1950 and then added surrounding land. Sub-building built 80-90 years ago has been extended several times. It is unknown when the part covering mandapa was extended.	<u>Not constructing building over garbhagriha. Over mandapa is ok.</u>	I ₁		
3	P	(60) himself	sari seller non-B	residence	cir. 1960-	residents	○	cir. 1960-	Main-temple and sub-building, originally separate, were built at the same time by his ancestor. His grandfather renovated and built extension in piloti form over mandapa.	<u>Not constructing building over shikhara. Over mandapa is ok.</u>	I ₁		
4	P	60 himself	souvenir shop -	residence, shop	cir. 1970-	residents	△	cir. 1970-	Buying this land with the temple and building, he extended it covering a part of the temple as they are today. Garbhagriha is used as a part of shop and the inside of shikhara as storage.	It is not taboo to use inside of garbhagriha or shikhara as shop or storage.	I ₂		
5	P	45 himself	electrician non-B	residence	1978-	residents	△	1978-	Main-Temple, established hundreds years ago, is one of important pilgrimage sites. Moving to this place in 1978, he built roofs and floors in the blank spaces between 5 garbhagrihas and walls, and made them indoor. Toilet was set up in the south part, which was early extension, where a Brahmin taking care of the temple lived.	<u>Not remodeling inside of shikhara and garbhagriha. Not constructing building over shikhara.</u>	I ₂		
6	P	39 spouse	music shop B	residence, shop	3 gener.	tenant	△	-	The process is unknown. Two main-temples were occupied by the lessee about 20 years ago and since then have been subleased as shops. One of main-temples is empty, because its linga was broken and flowed to the Ganges river.	It is problem to use temple as shop. Neither demolishing nor converting temple even without linga.	I ₂		
7	P	45 himself	sari seller B	residence, shop	5 gener.	residents	△	cir. 2000-	Main-temple, originally sitting in the courtyard isolatedly, has been half covered by extension of sub-building about 10 years ago. The outside of the temple was covered with fence to keep the temple visible. There is no problem with stairs slightly overlapping shikhara. Extension over mandapa is also ok because it's a kitchen.	<u>Not constructing building over garbhagriha. Over mandapa is ok (except living space).</u>	I ₁		
8	P	40 himself	accessory seller B	residence, shop	2010-	tenant (shop)	△	-	When his father bought this land in 1984, main-temple and sub-building had been in this form and very dilapidated. Main-temple, originally owned by maharaja of somewhere, has been lent, against his will, as shop to an acquaintance in need.	Though using temple as shop is undesirable, it's ok as not remodeling shikhara.	I ₂		
9	P	43 child	dairy seller non-B	residence	150-200 yrs.	residents	○	cir. 1990-	Main-temple is one of important pilgrimage sites. Aside the expansion of sub-building overhanging above main-temple in circa 1990, other process is unknown. Tiling the inner wall, changing the wooden door to iron, and repainting of outer wall are done.	n/A	I ₃		
10	P	- neighbor	- -	guest-house, shop	-	residents	△※	cir. 2010-	Main-temple was remodeled along with the extension and renovation of sub-building circa 2010. As the temple wall had been heavily damaged, keeping only shikhara and linga, garbhagriha was rebuilt as a part of sub-building.	n/A	I ₂		
11	P	55 himself	politician (Jainist)	residence, office	2007-	neighbor family neighbor shops	△※ △	2007-	The Jainist owner bought the land with a building and 2 temples, and rebuilt sub-building covering both main-temples 6 years ago. In consultation with an architect familiar with Vastu, 2 new shikharas were built on the rooftop of sub-building instead of covering the original shikharas with buildings. He had thought of demolishing the temples, but abandoned it because of pressure from neighboring residents.	<u>Highest point of the building must be a part of the temple, so new shikharas should be built alternative to covered original one.</u>	I ₂ II ₁		
12	P	42 himself	building material seller B	residence, shop, storage	200-300 yrs.	residents	○	-	Although the date is unknown, sub-building has contained main-temple since a long time before. Shikhara had penetrated to the 2nd floor. Shikhara was removed in 2000 when balconies and stairs were built.	n/A	II ₂		
13	P	40 child	designer -	residence	2011-	residents	△	-	Sub-building had already contained main-temple when the owner bought this land and the buildings two years ago.	n/A	II ₂		
14	P	73 himself	medicine seller non-B	residence	5 gener.	residents	△	1950-	Sub-building was originally an L-shape one-story and separated from main-temple. His father built the 2nd floor in 1950, and the temple became wrapped. When the 3rd floor was built in 2006, a window facing the side of shikhara was opened and an iron stick extending to the top of the roof was attached to shikhara.	<u>Better not constructing over shikhara. But in case of that, highest point of building must be a part of temple.</u>	II ₂		
15	C	44 employee	food seller -	residence	2002-	residents	○	-	Main-temple had been already covered with sub-building when he started living there. The 2nd floor was obviously built newer than the temple.	n/A	III ₁		
16	P	53 himself	flower shop non-B	residence, shop	6 gener.	residents	○	-	Main-temple was originally in the courtyard surrounded by U-shape sub-building. Building a roof and adding a room around main-temple made the current form. The upper floor was built afterward.	<u>Not constructing building or roof over shikhara.</u>	III ₁		
17	-	28 tenant	student B	student-dormitory	over 100 yrs.	residents	○	-	The process is unknown. Sub-building has been used as dormitory for student studying Sanskrit since over 100 years ago.	n/A	III ₂		
18	P	24 child	photo studio B	residence	2 gener.	residents	○	1873-	Though the process is unknown, a plate suggesting that the part of sub-building enveloping main-temple was built in 1873 is embedded in the wall.	n/A	III ₁		
19	P	71 spouse	tailor electric store B	residence, shop	2 gener.	residents	○	cir. 1950-	Main-temple was originally built at the 2nd floor level on the high platform (1st floor) and there was no floor above it. When the owner was a child, her father built the 3rd and 4th floor over the temple. He built the 5th floor afterward.	n/A	III ₂		
20	P	54 himself	tailor non-B	residence, shop	4 gener.	residents	△	cir. 1950-	His great-grandfather bought buildings that had been originally house for Brahmin attached to a temple. Main-temple and sub-building were separate at that time. Through repeated extensions main-temple became completely wrapped. One of the posts of mandapa was removed as it disturbs traffic.	n/A	IV		
21	P	60 himself	ex- sari seller B	residence	6 or 7 gener.	residents	△	cir. 2005-	Main-temple, originally in the courtyard surrounded by U-shape sub-building, was wrapped by it as a result of extension making courtyard indoors circa 2005. Though there is no room above garbhagriha, some rooms are built above mandapa.	<u>Not constructing room over shikhara. Opening window providing sunlight to temple.</u>	IV		
22	P	62 brother	food seller non-B	residence, shop	2 gener.	residents	×	cir. 1970-	Main-temple and sub-building were originally built side by side and the temple was visible from the street. In order to widen the house for four brothers' family, the upper floors were built over main-temple circa 1970. "Shikhara remains in the 2nd floor".	n/A	IV		
23	P	48 himself	cloth seller non-B	store-house	2008-	residents	△※	-	Main-temple originally built isolated had been wrapped by sub-building before he purchased them in 2008. The former owner sought to remove the temple secretly, but abandoned it because of pressure from neighboring residents. Shikhara still remains.	Shikhara should be open. <u>Not constructing room to live over temple (storage is ok)</u>	IV		

*1) Ownership of the main-temple and the sub-building / [P] Private, [C] Company. *2) Period when his/her family reside that place / [2(3) gener.] since at least his/her (grand)fathers generation.

*3) Person who perform daily puja and maintenance. *4) Accessibility to the main-temple / [○] Basically accessible, [△] Accessible if demanded, [×] Inaccessible, [※] With window through which one can pray from street. *5) Period when the main-temple is covered with construction of the sub-building.

扱いに関する注意点として、10件の事例において、主寺院の上部を建物で覆ってはいけない、という主旨の言及があった(表中:下線部)。うち2件(#1,11)は漠然と寺院上部への建設を、8件ではより具体的に、聖室(#2,7) またはその直上のシカラ(#3,5,14,16,21,23)を覆う建設をタブー視する。寺院の上を覆わないという意識は、規範として一定程度共有されているといつてよい。

しかし実際には少なくない融合寺院において、主寺院の上部は建物で覆われている。それは「寺院の上を建物で覆わない」ことが、単に規範として意識されていないケースがあるだけではなく、その具体的内容にばらつきがあることによる。例えば「寺院=聖室」と限定的に捉え、前殿の上であれば建設してよいという解釈がある(#2,3,7。いずれもI型)。前殿上の建設は認めつつ用途を浄性の観点から絞り、人が生活する居室やトイレ以外(倉庫や厨房など)であればよいとする見解もある^{注30)}(#7,23)。融合類型Ⅲ型の多くは副建物が聖室上にも少なからず重なっており、頂華付近だけを開放する状態である(Photo 1右)。これは頂華が神体の直上に位置することから、「神体=頂華」の上だけは塞がないという、より限定的な解釈の現れと考えられ、神体から頂華を経て上空へ伸びる垂直軸を維持しようとする意図が伺われる。また少数ではあるが、頂華を含む聖室上部全体を覆う代わりに、その真上にあたる副建物の屋上に新しいシカラを設ける(#11)、シカラに屋根の上まで伸びる鉄の棒を付ける(#14)といった代替措置をとるケースがあった。その理由は、「建物の最高点は寺院でなくてはならないため」と説明される。これらは、物理的には塞がれた寺院の垂直軸を概念的に上空まで延長する仕掛けであり、寺院の垂直軸の変奏的表現とみなしうる。

これらの一連の寺院上部を物理的または概念的に開放しようとする対応に通底するのは、3.2で触れたヒンドゥー寺院におけるシカラの塔状の形態が担う象徴性、とりわけ神体と頂華をつなぐ垂直軸に対する配慮であろう。ただしその垂直軸の含む範囲の解釈には、神体直上から聖室、前殿を含む寺院全体まで幅があるといえる。

6. 考察：融合寺院成立の諸条件

これまでの検討をふまえて、融合寺院という現象の生起にまつわる諸条件を整理する。第一の条件は、数多くの寺院が市街地に高密度に集積するという、聖地ヴァーラーナシー固有の状況である。都市の聖性が寺院の設立を促し、寺院の集積がさらに都市の聖性を高めるといった一種の循環構造がその背景にある^{注31)}。第二の条件は、20世紀後半から一貫して続く都市人口の増大と市街の高密度化である。それに伴い既成市街地に加わった開発圧と土地不足が、融合寺院発生の基礎的条件であることは、改めて確認しておきたい。開発可能な土地が不足するからこそ、土地利用効率の低い寺院の境内や上空のスペースにまで開発が及ぶのである。副建物の用途は主に住居であり、生活上の床面積拡大を動機とした増築により私的に所有された主寺院が覆われる。早くから市街化の進んだバックの領域において融合寺院への変化率が高いことも、開発圧が融合寺院発生の直接または間接的背景であることを示唆する。

寺院の集積という状況に対して開発圧という外在的要因が作用し、融合寺院という現象が惹起されると考えた時、それを受け容れる寺院の側にはどのような要因が内在するだろうか。手掛かりとなるのは、寺院の建設は必ずしも寺院の集積を意味しない点である。寺院

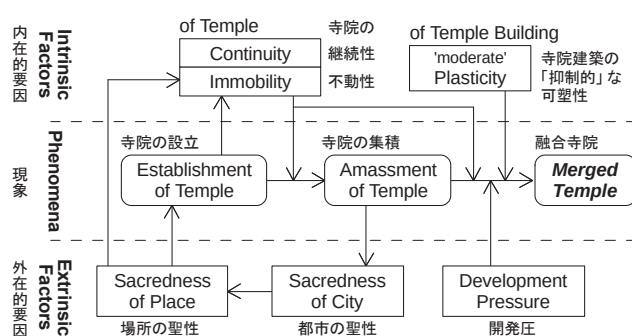


Fig.7 Schematic Diagram of Generation of Merged Temple

の集積には寺院が(少なくとも消失数が新設数を上回らず)残り続けることが必要であり、その意味で、歴史を通じて都市に寺院を高密度に集積せしめているのは、2.2で論じたヒンドゥー寺院の継続性と不動性である。多くの寺院が建てられ、同じ場所に残存し続けるがゆえに、寺院は一定の地理的範囲に集積されるからである。

同様に融合寺院という現象の中にも、この継続性と不動性が強く作用している。開発にあたって既存寺院を移動させず、わざわざ膨大な手間をかけて新しい建物に組み込むのは、寺院の不動性による。また寺院の継続性ゆえに寺院は除却されず、さらに神体を維持し祭祀を営み、外部からの参拝を許容する等、寺院機能も継続している。寺院の存続は所有者個人を超えた課題でもある。

以上は、聖なる場としての寺院の存続に関する問題であるが、その物的構成たる寺院建築は、その中でどのように扱われるだろうか。3.2で触れたように寺院建築は聖なる存在であるが、寺院の存在意義の根本たる場所の聖性とそれを象徴する神体に比べれば、その覆い屋である寺院建築の聖性は二義的である。世俗的用途をも含む寺院建築の改変が珍しくなく、融合寺院という現象がある程度社会的に許容されている状況は、この観点から理解できよう。興味深いのは、それにもかかわらず、その中で既存の寺院建築が建替えられずに維持される点である。寺院建築の聖性は二義的であるため実用上の要求に応じ可塑的であるが、二義的とはいえ聖性を帯びるため過度の改変は抑制されているためだろう。その程度は慎重に吟味されるが解釈には幅があり、結果として融合寺院の様々な形態を生じている。つまり、寺院建築の備えるこのような「抑制的な」可塑性が、開発による増築を受け入れつつ寺院(建築)をも維持する融合寺院という現象の、重要な媒体となっているのである。

このような融合寺院に作用する諸要因の関係を図式化したものがFig.7である。主に都市の状況に起因する外在的要因と、ヒンドゥー寺院に内在する継続性と不動性との拮抗の中で、開発と寺院の存続という一見矛盾する要求を並立させる方法として、融合寺院は現出していると理解できる。

7. まとめ

本研究を通じて得られた主な知見および論旨は、以下のようにまとめることができる。

- ① 既往研究を元にヒンドゥー寺院には、寺院であり続ける継続性、場所と結びついた不動性、世俗的用途の付加も許容する建物の可塑性、という特性が見られることを指摘した。
- ② ヴァーラーナシーの寺院の基本的情報を整理した上で、旧市街で

の寺院の高密度な集積、寺院は主に個人所有であること、建築要素としてはシカラと頂華が象徴的に重要であることを確認した。

③ 融合寺院の定義と判定要件を定め、現地調査から数・分布等市街地における存在の状況を明らかにした。調査地区の寺院の約4割が融合寺院である。また市街化の早い領域にやや多く融合寺院が見られる。

④ 平面的な重なり度合いと頂華の状況を指標に、融合寺院の形態的類型Ⅰ～Ⅳ型とその割合、および細分類8種を示した。主寺院を尊重する指向と副建物の増大指向という2つの力が拮抗する中で、これらの形態的バリエーションが生じていると考えられる。

⑤ 融合寺院の副建物は主として所有者家族が住む住居である。主寺院と副建物は一体的に所有されまた売買される。主寺院の日常的祭祀と管理は居住者が行うが、居住者は非バラモンである場合も多い。

⑥ 主寺院の寺院機能は維持され、副建物内に囲い込まれたケースでも主寺院へのアクセスは街に対して意識的に開かれている。

⑦ 融合寺院の発生年代は主に20世紀後半以降であり、多くは床面積増を動機とする一連の増築の中で副次的に形成されたと考えられる。

⑧ 寺院の除却・移転を禁ずる規範は強く意識されている。所有者の意向で寺院が除却される可能性もあるが、その存続はある程度公共的な課題と見なされている。

⑨ 寺院の上を建物で覆うことを禁ずる規範が共有されているが、その内容には解釈の幅があり、異なった建築的対応として現れている。

⑩ 以上の知見を総合し、寺院の集積した状況に外在的な開発圧とヒンドゥー寺院に内在する継続性と不動性とが拮抗しながら作用した結果、二義的な聖性を帯びた寺院建築の抑制的な可塑性を媒体として、様々な形態の融合寺院が生じていることを論じた。

⑤～⑨は23件のインタビュー調査に基づく知見であるため、その一般化には留保があるものの、一定規模の領域を対象とした現地調査にもとづき、融合寺院の実態およびその生起に関与する諸要因をある程度まで具体的に把握できた点は、本研究の成果である。寺院建築の扱いに関する規範、所有形態やその変遷に関するより詳細な検討は課題として残る。個々の事例において諸要因がどのように作用し、どのような建築的・空間的変化を生じているのか、またそれが周辺の街区構成や街路景観等に与えた影響については、稿を改め論じたい。

謝辞

本研究は科学研究費補助金・若手研究B「インドにおける既存寺院を核とした増築による都市空間の更新過程に関する調査研究」(課題番号25870882)による成果の一部である。現地調査ではRana P. B. Singh教授(Banaras Hindu University)、Rachita Srivastava氏、杉本昭男氏に助力を頂いた。記して謝意を表したい。

注

- 注1) 本稿は文献1～4)を元に、新たな知見と考察を加え大幅に加筆・再構成したものである。分析についても精査し事例数の値に若干の修正を加えている。
- 注2) 語義としては「複合寺院 composite temple」とするのが適切であるかもしれない。しかし、この語は「複数の寺院の複合体」「複数の神や宗教が同居する寺院」の意味で使われることが多いため、本研究では、用途やスタイルの異なる2種の建築が形態的に一体化する様を重視し、「融合」という語を採用した。
- 注3) 類似の現象は、ヴァーラーナシーほど顕著ではないが、インドの他都市でも散見される。またデリーでは、イスラームの宗教的建築においても同様の現象が見られることが報告されている(深見:2017)。

注4) リンチ(2010)は、時間的痕跡を読み取れる形で物理的・空間的に表現することが、居住環境の豊かさにつながることを論じる。

注5) 具体的には、ヴィシュワナート寺院を中心とする円環状のアンタルグリハ巡礼路の内側を対象とする。調査対象地区の詳細は柳沢(2004)を参照。

注6) MCV: 2006, pp. 20-23, Census of India: 2011, Singh: 2004, pp. 28-30

注7) 第1次調査: 2013/9/12～23、寺院分布・インタビュー調査(柳沢・小原・大村祐以・西原早紀・奥田隆太郎。いずれも名城大学理工学部建築学科柳沢研究室、以下同)、第2次調査: 2014/8/23～9/7、寺院分布・インタビュー・実測調査(柳沢・小原・山本・長屋美咲・渡辺愛理)、第3次調査: 2016/9/15～21、実測調査(山本・溝呂木雄介・加藤大誠)。寺院分布調査では、街区内の寺院も一部記載された1929年製の都市地図をベースとして用いた。

注8) 渡瀬: 1991, p. 330 (9-280, 9-285)。山下(2004, p. 29)によれば、寺院やそこでの神像への礼拝が重要性を増すのは、バクティ信仰の普及に伴う現象である。

注9) Vidyarhti: 1979, p. 44

注10) Kramrisch: 1976, p. 12、山下: 2004, pp. 83-85、柳沢: 2004, p. 78

注11) 関根(2004, pp. 490-492)は現代の路傍のインフォーマルな小寺院でさえ、一旦建設されると容易に移動されえない事例を詳細に論じる。日本で言う「精抜き」のように、寺院から神の存在を抜き去る儀式を経て、「合法的」に寺院建築を転用・除却する方法もあるが、管見では稀である。

注12) ミッチェル: 1993, pp. 209-214

注13) Bharné: 2012, p. 26

注14) 寺院の神体は多くの場合神の姿を象った像である。シヴァ神はその象徴である男根を象った円筒状のリンガLingaにより祀られる。寺院建築のみを残し神体が失われた例もわずかにあるが、寺院建築の存続状況も考察の対象とするため寺院に数えている。なお、樹木や石等に赤の着色を施したのもも神の現れる場として原始的な寺院と呼ぶのが、ここでは対象としない。

注15) 本調査では基本的に路上から確認したこと、上述の原始的な寺院の除外、ヴィシュワナート寺院周辺の調査が近年不可能となったこと等の事情により、柳沢(2004)に示された寺院数とは異なっている。

注16) 宮本: 2003, pp. 186-187

注17) Michell & Singh: 2010, p. 79。18～19世紀はヒンドゥー教徒の藩王の支配の元、聖地としてのヴァーラーナシーが復興をとげた時代であり、インド各地の有力者がヴァーラーナシーの寺院や宗教施設を寄進した。

注18) Vidyarhti: 1979, pp. 34, 35, 39, 149

注19) ヒンドゥー寺院の象徴的構造については主にミッチェル(1993, pp. 73-87)による。頂華と宇宙軸の関係については小倉(1999, p. 263)が論じている。

注20) 本研究は、元々寺院として建てられた寺院建築に対して施される増築現象に注目しているため、そもそも寺院と他用途の複合的建築物である非独立寺院に対する増築は、考察対象から外している。

注21) 融合寺院の定義には建設時期の前後関係が含まれるため、確定的判断にはヒアリングや実測を要するが、悉皆調査にあたっては便宜的に目視判断の可能な要件を定めた。なお、ヒアリングや状況から定義に該当する(しない)ことが確認できた場合は、要件に関わらず融合寺院と見なす(見なさない)。

注22) ヒンドゥー寺院の分布傾向の詳細については、柳沢(2004, p. 79)を参照。

注23) バックは1822年の地図に記載された領域区分で、当時から石造・レンガ造で建物ができていた市街化の歴史の古い領域である(柳沢: 2008, p. 155)。

注24) Ⅲ型のうち、シカラの周囲2面以上を頂華の高さを越える副建物の一部により囲われていることが現地で確認できたものに限り、Ⅲ₂型と判じた。そのため、他にⅢ₁型やⅣ型の一部がⅢ₂型である可能性もある。

注25) ただしⅢ・Ⅳ型は、外部から寺院の存在を確認することが難しいことも多いため、実際にはより多くの事例が存在する可能性が多分にある。

注26) 調査対象の中では唯一#6において、2件のうち一方の神体が失われているが、老朽による破損が理由であり、融合寺院となったことは無関係である。

注27) 一般的にどのような寺院でも、夜間および管理者の不在時は閉鎖される。

注28) これらの増築が違法の場合もあるため、取り締まりを警戒してか、一見して近年の増築であっても、その年代は不詳と語られる場合も多い。

注29) 本調査対象では、寺院建築の要素が失われた事例は、#20(前殿の柱を1本除去)と#12(聖室のシカラを除去)、#10(聖室の壁体を建替え)の3件のみである。前2者は利便性の向上、後者は壁体の崩壊を理由とする。ただし#10では、かなりの手間をかけて既存のシカラを新しい壁体の上に残している。

注30) 居室が許されないのは、不浄とされる月経中の女性が立ち入る可能性があるからと説明される。

注31) 重要な聖地や寺院、巡礼者が多く訪れる場所の周囲には多くの寺院が集まる傾向があり(柳沢: 2004, p. 42)、そこに多くの聖職者や巡礼者が集まることで、さらにその聖地としての重要性が高められていくと考えられる。

参考文献

- 1) Yanagisawa, K.: What is "Merged Temple", Religion and Culture in Multiethnic Society 19, pp. 3-18, 2016 (in Japanese)
柳沢究:「融合寺院」とは何か; 聖地ヴァーラーナシーにおけるヒンドゥー教寺院を核とした増築現象について, 多民族社会における宗教と文化 19, pp. 3-18, 2016
- 2) Ohara, R., Yanagisawa, K.: Study on Extension and Construction Surrounding Existing Hindu Temple in Varanasi, INDIA, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-1, pp. 989-990, 2014. 9 (in Japanese)
小原亮介, 柳沢究: ヴァーラーナシー (インド) における既存寺院を核とした増築現象に関する研究; 寺院の分布と融合のパターン, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, pp. 989-990, 2014. 9
- 3) Ohara, R., Yanagisawa, K., Yamamoto, S.: Study on Extension and Construction Surrounding Existing Hindu Temple in Varanasi, INDIA (2), Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-1, pp. 1209-1210, 2015. 9 (in Japanese)
小原亮介, 柳沢究, 山本将太: ヴァーラーナシー (インド) における既存寺院を核とした増築現象に関する研究 その2: 建築形式と立地形式から見た融合寺院の特徴, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, pp. 1209-1210, 2015. 9
- 4) Yanagisawa, K., Ohara, R., Yamamoto, S.: Study on Extension and Construction Surrounding Existing Hindu Temple in Varanasi, INDIA (3), Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-1, pp. 1211-1212, 2015. 9 (in Japanese)
柳沢究, 小原亮介, 山本将太: ヴァーラーナシー (インド) における既存寺院を核とした増築現象に関する研究 その3: 居住者へのインタビューに基づく背景と寺院への意識の考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1, pp. 1211-1212, 2015. 9
- 5) Yanagisawa, K., Funo, S.: Relationship Between Spatial Formation of Varanasi City (Uttar Pradesh, India) and Pilgrimage Routes, Temples and Shrines, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No. 583, pp. 75-82, 2004. 9 (in Japanese)
柳沢究, 布野修司: ヴァーラーナシー (ウッタール・プラデーシュ州, インド) の都市空間形成と巡礼路および寺院・祠との関係, 日本建築学会計画系論文集, No. 583, pp. 75-82, 2004. 9
- 6) Fukami, N.: Urban development and Preservation of Monuments in Historical Delhi, Tomorrow of the Asian Studies, No. 36, pp. 4-8, Research and Information Center for Asian Studies, 2017 (in Japanese)
深見奈緒子: 歴史都市デリーの都市開発と遺跡保存, 明日の東洋学, No. 36, pp. 4-8, 東洋学研究情報センター, 2017
- 7) Lynch, K.: What Time is This Place?, Otani Laboratory, University of Tokyo (trans.), Kajima Institute Publishing, 2010 (first publ. 1974) (in Japanese)
リンチ, ケヴィン: 時間の中の都市; 内部の時間と外部の時間, 東京大学大谷幸夫研究室訳, 鹿島出版会, 2010 (初版 1974)
- 8) Municipal Corporation, Varanasi (MCV): City Development Plan for Varanasi (JNNURM); Final Report, August 2006, 2006
- 9) Singh, R. P. B.: The Ganga Riverfront in Varanasi, a Heritage Zone in Contestation, Context: Built, Living and Natural, vol. 1 (1), pp. 25-30, 2004
- 10) Kramrisch, S.: The Hindu Temple, vol. 1, Motilal Banarsidass, 1976
- 11) Michell, G.: The Hindu Temple; an Introduction to Its Meaning and Forms, Kamiya, T. (trans.), Kajima Institute Publishing, 1993 (in Japanese)
ミッチェル, G.: ヒンドゥ教の建築; ヒンドゥ寺院の意味と形態, 神谷武夫訳, 鹿島出版会, 1993
- 12) Meister, M. W.: The Hindu temple: Axis and Access, in K. Vatsyayan (ed.), "Concepts of Space, Ancient and Modern", Abhinav Publications, pp. 269-280, 1991
- 13) Ogura, Y.: Spatial structure of Indian world, Shunjusha, 1999 (in Japanese)
小倉泰: インド世界の空間構造; ヒンドゥ寺院のシンボリズム, 春秋社, 1999
- 14) Kurokuchi, H., et al.: Planning Method in "Bhubanapradipa", Orissa, North-INDIA, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-2, pp. 513-514, 1996. 7 (in Japanese)
黒河内宏昌, ほか6名: 『ブバナプラディパ』 {インド北部型(オリッサ州)の建築書} の設計方法, 日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2, pp. 513-514, 1996. 7
- 15) Yaguchi, N.: A Typological Study on the Ground Plan of the Temples Built by the Hoysalas in India, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No. 506, pp. 169-175, 1999. 10 (in Japanese)
矢口直道: インド・ホイサラ朝寺院の平面についての類型学的考察, 日本建築学会計画系論文集, No. 506, pp. 169-175, 1999. 10
- 16) Bharne, V. & Krusche, K.: Rediscovering the Hindu Temple; The Sacred Architecture and Urbanism of India, Cambridge Scholars Publishing, 2012
- 17) Sekine, Y.: Heterotopology of the Urban, in Sekine Y. (ed.), An Anthropology of 'the Urban in the Contemporary World', pp. 472-512, University of Tokyo Press, 2004 (in Japanese)
関根康正: 都市のヘテロトポロジー, 関根康正編「〈都市的なもの〉の現在」, pp. 472-512, 東京大学出版会, 2004
- 18) Michell, G. & Singh, R. P. B. (ed.): Banaras; The City Revealed, Marg Publications, 2010
- 19) Gutschow, N.: Benares; The Sacred Landscape of Varanasi, Axel Menges, 2006
- 20) Vidyarthi, L. P.: Sacred Complex of Kashi; A Microcosm of Indian Civilization, Concept Publishing Company, 1979
- 21) Watase, N. (trans.): Laws of Manu, Chuokoron-sha, 1991 (in Japanese)
渡瀬信之訳: マヌ法典; サンスクリット原典全訳, 中央公論社, 1991
- 22) Yamashita, H.: Hinduism; India as 'Mystery', Kodansha, 2004 (in Japanese)
山下博司: ヒンドゥー教; インドという〈謎〉, 講談社, 2004
- 23) Miyamoto, H.: Sacred Place of Hinduism, Yamakawa Shuppansha, 2003 (in Japanese)
宮本久義: ヒンドゥーの聖地 思索の旅, 山川出版社, 2003
- 24) Yanagisawa, K., Funo, S.: Spatial Formation of Mohalla in Varanasi City (Uttar Pradesh, India), Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No. 623, pp. 153-160, 2008. 1 (in Japanese)
柳沢究, 布野修司: ヴァーラーナシー (ウッタール・プラデーシュ州, インド) におけるモハッラの空間構成, 日本建築学会計画系論文集, No. 623, pp. 153-160, 2008. 1

OUTLINE AND BACKGROUND OF “MERGED TEMPLE”

Study on extension and construction surrounding existing Hindu temples in Varanasi Old City, India

Kiwamu YANAGISAWA ^{*1}, *Ryosuke OHARA* ^{*2} and *Shota YAMAMOTO* ^{*3}

^{*1} Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr.Eng.

^{*2} Sumitomo Forestry Co., Ltd., M.Eng.

^{*3} Yamamoto Architecture Design Office, M.Eng.

This paper discusses the outline and the background of the phenomenon named "merged temple" (Photo 1, Fig. 1), a composite building occurred by extension of 'sub-building' covering or wrapping an existing Hindu temple, or 'main-temple', frequently observed in the Old City of Varanasi (Uttar Pradesh, India), revealing their number and distribution, morphological variations, forming process and condition, and so on, through field survey and interviews with residents (Table 3). The main points of argument and the findings can be summarized as follows.

(1) Based on the past researches, the authors pointed that Hindu temple has three characteristics, that is, the continuity (temple continues to be as temple), the immobility (temple rooted in the place cannot be moved), the variability (temple building can change its form as necessary while allowing secular uses).

(2) Reviewing the basic information about temple in Varanasi, it was confirmed that numerous temples have been densely amassed in the old city, most of temples are privately owned, and that shikhara and its finial are symbolically quite important elements of temple building (Photo 3, Fig. 3).

(3) "Merged temple" is defined as a permanent composite building with internal space that occurred as the result of the extension or new construction of the adjacent building covering or wrapping an existing Hindu temple originally built independently (Fig. 4).

(4) Setting the criteria of merged temple, the authors revealed its number and distribution tendency by field survey, and indicated its presence in the urban space. Approximately 38% of temples in the surveyed area are merged temples and they are found somewhat more in the area early urbanized (Fig. 2, Table 1).

(5) Eight morphological types of merged temple were shown based on the degree of horizontal overlapping and the covering of the finial (Fig. 5, 6). Those morphological variations seem to be generated through the competition of two forces, one oriented respecting the existence of main-temple and the other oriented increasing the space of sub-building.

(6) Most of sub-buildings of merged temples are residences where their owner's family lives. Main-temple and sub-buildings are owned and sold together. While residents are often non-Brahmin, they perform daily puja and management of the main temple.

(7) The function of main-temple always remains, and the access to main-temple is almost consciously opened for neighbor devotees or pilgrims even in the case that main-temple is completely wrapped within sub-building.

(8) Merged temples have occurred mainly since the late 20th century. Many of them seem to have been secondarily formed through a series of extension of the sub-buildings motivated to increase their floor area.

(9) Residents are strongly conscious the norm prohibiting destruction and relocation of temples. While there is a possibility that temple may be demolished with the intention of the owner, its survival is regarded as a public issue to some extent.

(10) Although the norm that prohibit covering temple with building are shared among residents, its content has a range of interpretation and it appears as different architectural correspondences.

(11) Based on the above findings, the authors discussed that merged temples of various shape and degree are generated as a result of the interacting of the extrinsic development pressure and the intrinsic characteristics of Hindu temple, the continuity and the immobility, in the urban space historically amassing numerous temples. There the moderate plasticity of temple building, which is secondarily sacred, works effectively as a medium (Fig. 7).

(2017年9月25日原稿受理, 2018年1月23日採用決定)